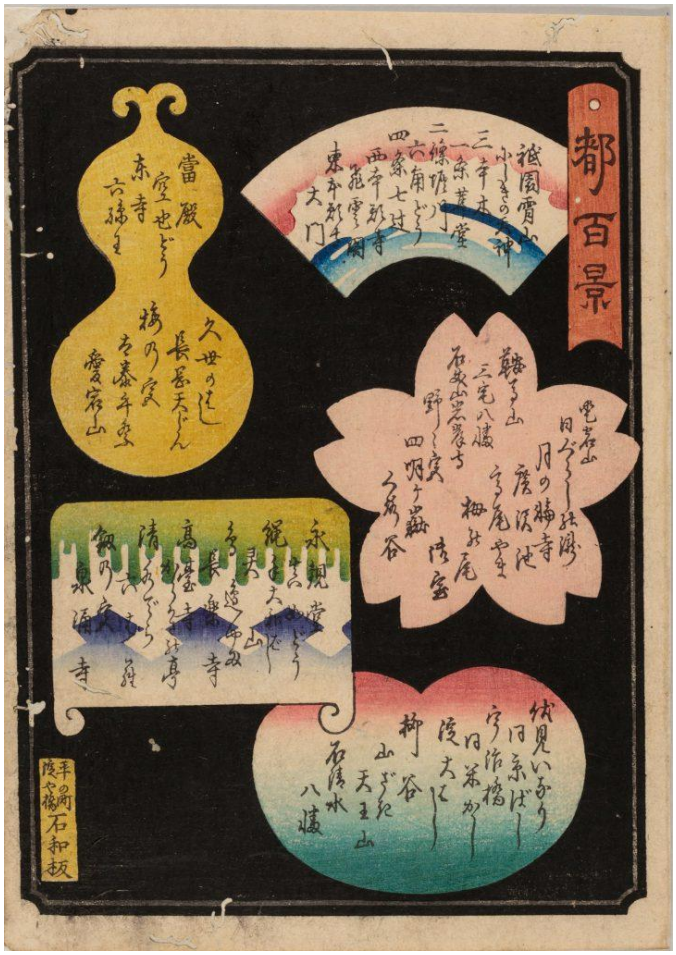
〈貴重書〉都百景（都名所百景）

江戸時代の京都を視覚的に見ることのできる本に『都名所図会』（安永 9 年（1780）刊）があります。秋里籬島（あきさとりとう）の文章と竹原信繁（たけはらのぶしげ）の絵とで京都の名所を案内しています。その後、『拾遺都名所図会』（天明 7 年（1787）刊）、『東山名勝図会』（元治元年（1864）刊）など、類本が数多く作られました。これらの本は木版の単色刷りで、色がないのが寂しいところです。

色彩を伴って京都を案内するものに、歌川広重の浮世絵版画「京都名所十景」（天保 5 年（1834）頃）があります。淀川、通天橋、八瀬、糺河原（ただすかわら）、嵐山、四条河原、嶋原、清水、金閣寺、祇園社の 10 景を、季節感も入れて刷り上げています。広重の「東海道五十三次」では、京都の風景として「三条大橋」が描かれています。

歌川広重は安政年間（1855～60）に江戸の名所を題材にして「江戸百景」を描きました。その好評を受けて、大坂の版元である石川屋和助（石和）は「浪花百景」と「都百景」（「都名所百景」）を企画し、制作しました。「都百景」は大坂の浮世絵師歌川芳豊（うたがわよしとよ）（北水）、歌川国員（うたがわくにかず）、京都の梅川東居（うめかわとうきょ）、川部玉園（かわべぎょくえん）、四方春翠（よもしゅんすい）の 5 人の画家により描かれました。梅川東居と四方春翠は、『東山名勝図会』の画家でもあります。

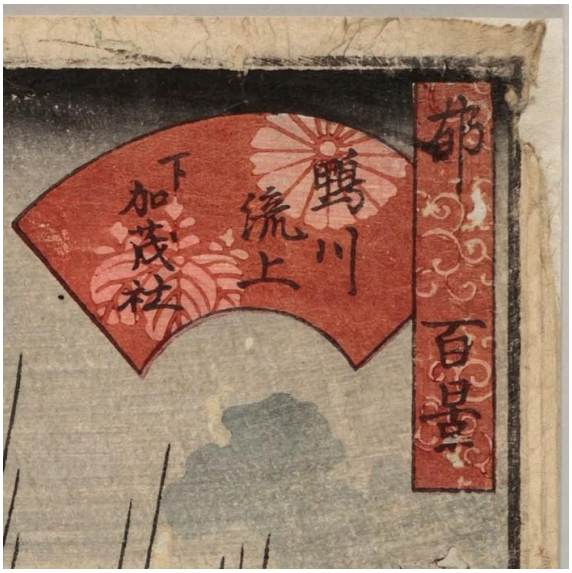

都百景
祇園社
三十三間堂
二条城
四条七辻
六角どうり
西本願寺
東本願寺
大門
當麻寺
東寺
六角堂
久世の橋
長谷天じん
梅の宮
愛宕山
月の橋寺
三宅八幡
梅ヶ尾
四明ヶ嶽
八瀬谷
清水
高台寺
祇園の宮
東福寺
八瀬水
柳谷
天王山
石和板

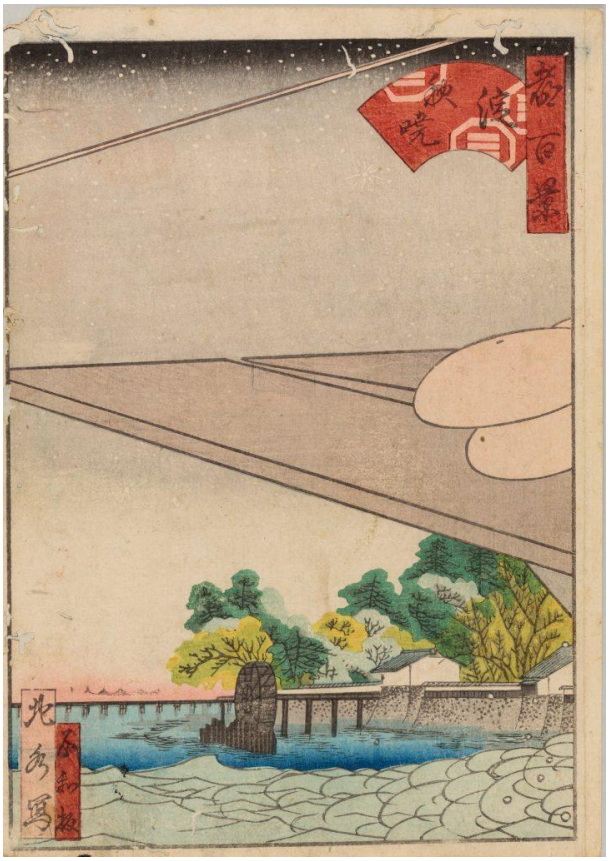
都百景
鴨川流上
下加茂社
石和板

「都百景」は幕末の文久 3 年（1863）から慶応元年（1865）頃に描かれたと考えられます。それゆえに当時の歴史的事件や世相なども描き込まれています。例えば、歌川北水画「鴨川流上　下加茂社」では、賀茂川に架かる橋の上を、鳳輦（ほうれん）が通過する様子を描きます。これは、文久 3 年 3 月 11 日に孝明天皇が上・下加茂両社に行幸した様子を描いたものです。

また、梅川東居画「下加茂　御手洗川」は、現在では見られなくなった下鴨社境内の納涼風景を描いています。

さらに、題箋にまで意識して描く作品も多くあり、鑑賞者は細部に至るまで読み込む楽しみがあります。
例えば「鴨川流上　下加茂社」に描かれた扇形の題箋には、皇室と所縁の菊紋と五三桐紋が、淀城を描く「淀　秋暁」には、淀藩稲葉氏の家紋である「折敷に三文字紋」が描き込まれています。





京都学・歴彩館では、近年「都百景」（「都名所百景」）を収集し、それをデジタル画像で見られるようにしました。1枚1枚の画像を見ていくと、幕末の京都の光景がよみがえってくるかのようです。そこからは、『都名所図会』とは違った京都のイメージが紡ぎだされるのではないでしょうか。

（2019 年 12 月 6 日公開）